



医学部だより

第7号

2004.12.28

求心力のある医学部をめざして！

医学部長 曾根三郎

平成16年度からの国立大学法人化を契機に医学部は大きな変革期を迎えています。平成14年11月から医学部長として医学部の発展に向けた取組みを進めて来ましたが、さらに2年の大役を任せられ責務の重大性を再認識しています。医学科では、この数年、チュートリアル、クリニカルクラークシップの教育の導入、さらに今年からの卒後初期臨床研修の義務化が始まり、卒前から卒後に向けての一貫した医師育成カリキュラムの構築が求められています。栄養学科には管理栄養士の育成だけでなく、教諭資格取得のための新カリキュラムが必要とされています。

また、保健学科は平成17年度に最終学年の学生を迎え、新しい歴史を刻みつつあります。本学医学部がこれまでの輝く伝統をもとに、優秀な専門医療人を育成する拠点として今後とも発展するためにはなお多くの課題が残されています。特に、医学教育内容の充実と共に「よく学びよく遊ぶ」をモットーに医学部学生として誇りに思える快適なキャンパス環境の整備を重点課題として取り組みたいと考えています。学生諸君が将来、チーム医療を担うためにも共に学べる場や、生涯において役立つような経験や知識を先端医学、先進医療の創生に情熱を燃やす教員との触れ合いを通して体得できる場も多く設けたいと考えています。蔵本地区はゲノム医学、生命科学の教育・研究の拠点として世界から注目されています。皆さんには fighting spirit をもち大きな目標に向かってチャレンジして頂きたい。

学生諸君が素晴らしい教育環境の中で本学医学部から育ち、社会に職を求め活躍する機会を得ても、さらなる知と先進的な技を求めて大学院教育部へと進学する気持ちが湧き上がる大学へとインフラを整え発展させたいと考えています。

●●● 特別企画 (対談) ●●●

「ライフサイエンス拠点化構想」について3部局長が大いに語る！

曾根：医学研究の大きな課題は、難病に苦しむ患者さんに正確な診断法や新しい治療法を開発していくことです。ヒトゲノムが解読され、ポストゲノム時代の幕開けとなり、病気の仕組みを解明していくために遺伝子レベルや蛋白レベルでの取組みが注目されています。蔵本地区はまさにそのようなアプローチが出来る基盤を持っています。具体的にどのような取組みをなされていますか？

板倉：4分野1施設からなるゲノム機能研究センターは「個体レベルのゲノム機能学」を共通目標として研究・教育に取り組んでいます。遺伝情報分野では「ありふれた病気」である糖尿病、関節リウマチ、先天性代謝異常症を対象にヒトのゲノム多様性マーカーであるスニップスを用いる研究と、糖尿病発症マウスの解析により、疾患に関わりのある遺伝子を発見しようとしています。分子機能解析分野ではショウジョウバエ等を用いて脆弱X症候群の原因遺伝子がRNA代謝と関連することから疾患とRNA代謝の関連を研究しています。遺伝子実験施設では胸腺の発生と分化に関わる遺伝子群をメダカとマウスを用いて解析しています。遺

伝子発現分野はミトコンドリア機能を分子レベルで解析しています。蛋白情報分野は癌と細胞老化の課題を個体レベルで解析しようとしています。これらの研究はいずれも疾患の理解に関係すると考えています。特にゲノム多型を用いる個人差を検討する研究は、疾患に罹りやすい遺伝的背景を明らかにするので、いわゆる個人化医療への道を開くものと考えています。

蛭名：生命情報は遺伝子(ゲノム)、生命活動は酵素によって担われており、酵素はどのような病気にも関係している重要な分子です。酵素センターでは以前、酵素の基礎的な研究を中心にしていましたが、現在は6部門すべてで基礎的な研究だけではなく、病気の解明を視野に入れた臨床に直結した医学的研究を行っています。遺伝子工学・発生工学の進歩、ゲノミクス・プロテオミクスの発展など医学研究の方法論の進歩がそれを可能にしました。最近では基礎医学研究者と臨床医学研究者との境界があまりはっきりしなくなって来たような感じがしております。



写真左から

板倉光夫 ゲノム機能研究センター長

曾根三郎 医学部長

蛭名洋介 分子酵素学研究センター長

曾根：医学・医療の発展を期する上で大きな原動力となるのが次世代を担う人材の育成です。平成15年度に国際的な教育・研究拠点を作るために文科省が導入したCOEプログラムに本学から医学科、栄養学科からの2件が採択され大きく注目されました。これは、蔵本地区全体での知の結集の成果だと言えます。

蛭名：徳島大学の医学部が2つのCOEプログラムを獲得したことは、地方大学としては快挙だと言われていますが、徳島大学の過去の研究実績からすると、むしろ当然の事の様に思われます。医学科COEの場合そのテーマはプロテオミクスを使った医学研究です。今までは個々の酵素タンパクに関して行っていた研究が、プロテオミクスの発展により何千何万という酵素タンパク群の変化としてとらえられるようになってきました。しかしcDNAのクローニングのように100万個の分子の中から一個を拾って来るというような精度がプロテオミクスの手法にはまだありません。今後技術的に改良されればもっと医学応用が可能になると思います。

板倉：医学部が獲得したCOEプログラムは時代の要請を受けた新しい研究分野を開くための大きな可能性を秘めた研究の流れと考えています。ゲノム配列の決定を受けて、ゲノム機能学がスタートしたばかりという状況で、次はプロテオミクスの研究開発の必要性が広く認められたことは、ゲノム解析が終了しプロテオミクスに移行するのではなく、ゲノム機能学を目指す立場からは疾患に関係する遺伝子を発見した上で、その機能を蛋白質のレベルを含めて検討するのがプロテオミクスであり、ゲノム機能学はプロテオミクスと手を携えて進むべき分野と考えています。

曾根：修士課程も多様な人材の輩出という点で重要ですね。

蛭名：徳島大学医学部はゲノム・酵素両センターを抱え地方大学としては突出して、生命科学研究が盛んな大学です。しかし学部学生を持たない両センターは研究の中心となる博士課程大学院生を獲得する事に困難を感じておりました。昨年度より医科学修士課程を設立し医学部出身者でなくても医学研究に参画していけるよ

うなシステムを作りました。医学は自分の体に関する研究ですのでどの学部出身者でも興味を持って頂けると思います。修士課程卒業者から博士課程を経てプロの医学研究者に育ち、将来活躍してくれるものと期待しております。

曾根：サイエンスは若い時に挑戦すべきだと言われる。平成16年度から臨床研修が義務化され、大学院進学も変化する可能性がある。これからも国際的に活躍できる人材が育っていくには大学院は今後どうあるべきですか？

板倉：医学という医療を具現化するためには臨床研修を義務化することが必要であると判断されたものと理解しています。一方大学の使命として、学問、研究を介して事業化を含めて社会へ貢献することが求められています。この分野は、修士および大学院博士課程の学生、ポスドク、企業との共同研究といったスキームで担われています。我々は医療を具現化する優れた医師を養成すると同時に、大学院大学として生き残ることができる大学を目指すべきだと考えています。大学院大学を目指す以上、最終的に臨床医を目指す者の大部分が大学院で研究を行うことをむしろ原則にする方向を求めていくことが必要と考えています。

蛭名：臨床研修が義務化され、専門医の資格を取ることが求められる今、臨床医の多くが大学院に入学し博士号を取得するという事はなくなると予想されます。研究をしたいものだけが大学院に入学してくる事はむしろ大学院の質を高めることになると思います。しかしこのような事態になってきたとき、大学院の定員割れが起こらないように医学部卒業者でない医学研究者を育てる事が必要になってきます。アメリカでは医学部出身者でさらに大学院に行き研究しようとするものは一部のエリートです。ほとんどは非医学部出身者が大学院に入学してきます。徳島大学医学部がさらに発展するためには、大学院にいろいろな分野の卒業生を受け入れ、援助し、協力していく事が必要だと思えます。

曾根：本学には、M.D. -Ph.D. コースが設定されており、医学科4年を終了した時点で、4年制大学院へ進学し、博士号取得後、医学科5年次に戻る制度があります。この制度を医学生はどのように利用すべきですか。

蛭名：この制度のすばらしさは意欲あふれる学生しか入学しないという点です。ですから医学研究科をあげて経済的にもバックアップをする必要があると思います。徳島大学独自にこのシステムを日本一のものにしていただきたいと思います。大学院へ入学した学生には友人から取り残される一抹の不安、国家試験に対する不安があると思います。しかし臨床医になって診療に明け暮れる前に、しっかりと医学研究を行う力を身につけることは、たとえ臨床医の道を選んだとしても大きな支えになると思います。これからは研修医制度が始まり多くの卒業生が大学から離れます。その時、大学院をすでに卒業し博士号を取得していることは選択肢が大いに広がる事になると思います。

板倉：最も安全性が高く、高い効果が得られる可能性が高い医療を実施するためには、その原理と学術的背景を研究する、例えばM.D. -Ph.D. コースの制度を利用することが大切だと考えます。激しい勢いで進む世界の研究開発の流れに遅れずに研究を行うためには、できるだけ若い時期に研究生生活を体験することが重要であると考えからです。

曾根：本学の大学院医科学教育部カリキュラムはバランスよく計画されており、ゲノム研、酵素研からの個性ある教授が教育に参画しています。蔵本地区の特色と個性を出すためには医・歯・薬・栄養の生命科学系大学院にどのような役割を期待しますか？

蛭名：学生が自慢できるような世界に通用する一流の研究をする事だと思います。無言のうちにそれに刺激され大学院生も学習・研究に励むものと思います。特に酵素センターは大学院生にマンツーマンの指導ができるような充実した教育体制にあります。

板倉：徳島大学の蔵本キャンパスは、医・歯・薬・栄養の生命科学系大学院という組織と各学部、分子酵素学研究センターおよびゲノム機能研究センターという施設を擁しています。このことは日本全国の中で特徴的なキャンパス構造となっていると考えています。さらに研究組織の区分が、生化学、薬学、歯学といったこれまでの分野の壁は、例えばゲノムや遺伝子や蛋白をいづれの研究グループも同様に扱っているという点で、ほとんどなくなってきたと考えています。さらにDNA シークエンサーにしても、質量分析計にしても、共焦点顕微鏡にしても、むしろ基本的に必要な技術と方法であるという状況に変わってきています。国立大学法人化後の厳しい予算状況に対応して生き残るためには、生命科学系が団結して研究を進めることが求められていると考えています。

曾根：先生方の研究センターには時代のニーズに応える新しい学問を創生していく役割と使命があります。最後

に、医学部学生へのメッセージとして抱負なり希望なりをお聞かせください。

板倉：医学部に入学することの目的は医師になることと、医学研究者になることの両方を含んでいます。優秀な医師は患者を正しく治療することで社会に貢献します。医学研究者は、どんなに小さくても他の誰も証明することができなかった新しい事実を発見することで医学の基礎を支えます。勿論医学のみならず、薬学・歯学・栄養学の基礎を支え、ひいては新しい治療法の開発に結びつくこととなります。医学部が単に医師の養成校であるという考えにとどまらず、新しい発展を目指す研究への挑戦こそが次世代の医療を開くということに肝に銘じて頂きたいと考えています。

蛭名：研究センターはノーベル賞学者を輩出するような研究を目指すことが重要だと思います。それにより若い研究者は大いに激励されます。本年度ノーベル化学賞は、ユビキチン・プロテアソーム系というタンパク質分解のメカニズムを解明した3人の研究者に贈られました。このプロテアソーム発見者の一人は酵素センターに在籍されていた田中啓二博士でした。残念ながら田中博士はノーベル賞受賞には至りませんでした。酵素センター在籍中にプロテアソームに関する100近い論文を発表されました。もし彼がノーベル賞を受賞していたらと思うと残念でなりません。しかしノーベル賞に近い研究者を酵素センターは輩出しており、うれしく思っております。

酵素センターは50年の歴史がありますが、またその弊害もあります。元々医学部に所属していたため、医学部の部門が横滑りしてきて研究センターができた感があり全体的にのんびりした気質があるようです。もちろんいい研究をするにはゆとりが大切です。ただ法人化後の研究センターは事情が異なってきたと思います。やはり学部では教育、臨床などの重い duty があるために必ずしも研究のための十分な時間がとれません。それを補い、世界的にも認められるような大きな研究を目指して行くことが、大学から期待されている研究センターの使命だと思います。研究は楽しむものです。山登りと同じで頂点に立ったとき始めてその喜びと達成感が味わえます。科学者は人生での喜びを最も感じられる立場にいます。医学部を卒業して医学の道を進む以上、開業医、勤務医などの臨床専門医になっても、“医学は科学であり学問である、事を忘れてはいけない”と思います。医者は人の命を預かる訳ですから、最新医学の研鑽を積み続けることが必要だと思います。

曾根：蔵本地区の医・歯・薬・栄養学の4つの研究科が統合され、ヘルスパイオサイエンス研究部がスタートしました。平成18年度には保健科学教育部設置の構想もあり、生命科学の総合的な教育・研究の拠点としての発展がさらに期待されています。さらに、加速するためには良い研究と良い人材育成が共通のキーワードであり、本研究部には分子酵素研究センターとゲノム機能研究センターとの連帯と連携が今後ますます重要となっております。

教育環境の整備 —施設の改修と教育カリキュラムの改革—

医学科長 福井 義浩



この度、臨床第1講堂の改修が完了し、青藍講堂として生まれ変わりました。また、プレハブ講義棟も完成し、医学部3学科の講義は余裕を持って行えることになりました。蔵本地区での学部間の合同講義も行いやすくなります(トピックスを参照)。

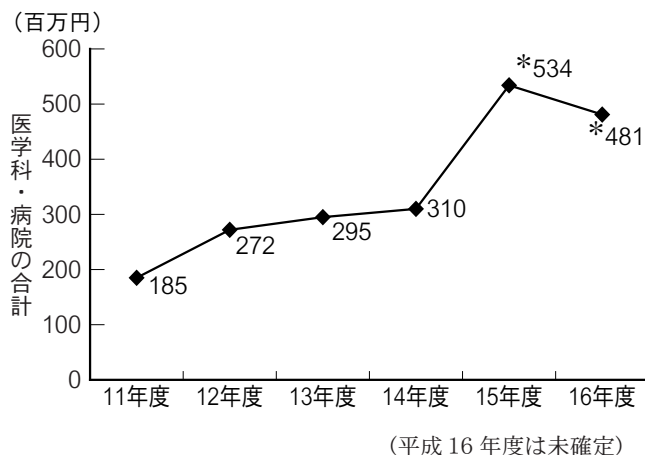
医学科では講義室の老朽化が進み、他学部と比べて施設改修が甚だしく遅れています。来年度こそ施設整備予算が付くように、大学本部や文部科学省に予算措置をお願いしなければなりません。研究面では医学系と栄養学系にCOE(卓越した研究教育拠点)が認められましたし、科学研究費等の外部研究資金も飛躍的に伸びています(図参照)。医学科の最優先課題は、学生のための教育環境整備と教育カリキュラムの改革・その弾力的な運用であると思います。

現在、従来からの分野単位の講義・実習に加えて、1年次に医学入門(看護体験実習等)、3、4年次にチュートリアル(系統別病態診断)、5年次にクリニカルクラークシップ(臨床実習)等のグループ単位の実習が行われています。従来型の講義、小グループでの実習・演習、どちらも重要ですが絶えず教育カリキュラムを見直し柔軟に運用する必要があります。また、4年次に研究室配属、6年次に実践医学実習を行っています。各自が興味ある研究室や病院を選んで約2ヶ月間実習

することになっています。基本的に研究室配属は学内の研究室、実践医学実習は学外の関連病院で行うことになっていますが、希望者は国内でばかりでなく海外で実習を行うことも可能です。この場合は英語能力ばかりでなく、危機管理への対処も重要です(詳細は特集記事を参照)。

教員の立場からでなく、学生の目線で(ただし、学生の要求をすべて受け入れることではなく)、良い医学教育カリキュラムを模索し続けなければならないといつも肝に銘じています。

過去6年間の医学科と病院(医科)の研究助成金の獲得額
(※平成15、16年度は医学系COE経費を含む)



来年度から新たに栄養教諭のコースが選択できるようになります

栄養学科長 中屋 豊



最近の栄養学科の大きな動きとしては、文部科学省に栄養教諭の養成校としての申請を行ったことです。現在、審査中で、未だ正式の許可はいただいていませんがもし、許可されると、来年度入学の学生から、このコースを選択できるようになります。

選択した場合には講義が22単位増えることになり、実習もあり学生にはかなりの負担になります。徳島大

学医学部栄養学科は、時間を十分とり学生の時代に高度な卒業研究が行えることが特徴の一つでした。今年から、国家試験の前倒しで、卒業研究が3ヶ月減りました。今回はその上に、教員免許のための講義を受けるとさらに授業が圧迫されるというジレンマもありましたが、学校教育に栄養を取り入れることは非常に重要で、また栄養士の新しい職場の開発としても重要です。教員、学生とも話し合い、大多数が栄養教諭を取り入れることに賛成したため、申請を行いました。来

年からは教育システムを大幅に変更する必要がありますが、教員全員の協力で乗り切る予定にしています。

また、栄養学科の講義棟が完成し（講義棟完成の記事参照）、10月から授業を行っています。もう一つのニュースは、台風23号で栄養学科棟の周りは海のようにになりました。その日は大学の前の国道も水びたしになり交通が混雑しました。その時の栄養学科棟の前の写真を撮っていますので掲載します。この水の問題は以前よりあり、昔より少しは改善しましたが、今でも栄養学科棟の前は少し雨が降ると水がたまります。これも早々に改善してもらうように働きかけています。



保健学科から

保健学科の発展に向けて

保健学科長 前澤 博



保健学科では平成14年4月に第1期生を受け入れて以来2年半が経過し、3年次生に対して看護学専攻では学内外施設での臨地実習、また放射線技術科学および検査技術科学の両専攻では専門性の高い実習が開講され、また1、2年次生においても

予定された授業が進行しています。目下の懸案は、講義室、実習室、更衣室等の不足を補う施設改修計画の実現と教員の充足です。

広報では、今年度も保健学科概要、保健学科だよりを作成、配布し、またホームページ公開、高等学校での説明会、学内体験授業などを行っています。本年8月に開催された看護学専攻体験入学に40名、また本学科オープンキャンパスには県内外から185名の参加があり、アンケートからは好印象をもたれた高校生が多く、将来我々と共に学ばれることを期待しています。

本学科の教員は多くの時間を教育に充てていますが、研究環境の整備と研究時間の確保にも努力しています。本学科教員とヘルスバイオサイエンス研究部、大学病院および他学部の諸先生との共同研究も増えています。大学院設置については、来年の審査に向け準備を進めています。今後共諸先生の御支援をいただければ幸いです。

学習環境の改善に学生と教員が共に取り組むため、クリーン対策ワーキングを設けました。学生が正副委員長を務めており、斬新なアイデアと行動力に期待しています。学生の声投書箱を設置しました。また、昨年に続き学科棟南館2階トイレが改修され、清潔になりました。学長はじめ関係各位にお礼申し上げますと共に、今後共御支援をお願いいたします。

保健学科の発展のため、学生と教職員が共に努力してゆきたいと考えています。

平成16年度教育基盤設備充実経費要求品目

品 目	申請者・使用者	要求額(千円)	備 考
学生自習用設備	教務委員会	9,496	採 択 500万円
LDR システム	看護学専攻	10,205	非採択
画像診断機器管理システム	放射線技術科学専攻	9,898	非採択
細胞・形態検査システム一式	検査技術科学専攻	10,210	非採択

プロジェクト実施計画

計 画 名	申 請 者	要求額(千円)	備 考
臨床技能開発システムを取り入れた学生の看護実践能力の質を保証する仕組づくりの構築と評価	田村 綾子	1,072	採択 50万円
遺伝子診断及び細胞治療に関わる技術者養成プロジェクト	山野 修司	9,715	採択 300万円

医学系研究教育拠点：拠点形成の現況について

拠点リーダー 生体情報内科学分野 松本俊夫

1. 第1回COE徳島国際シンポジウムについて

21世紀COE医学系拠点では、8月23日に第1回COE徳島国際シンポジウムを開催した。海外から核内受容体の研究で何れも世界をリードしている Kenneth Korach (NIH)、David Mangelsdorf (University of Texas) の招聘演者2名に加え、国内からも今村健志 (癌研究所)、深水昭吉 (筑波大学)、宮島 篤 (東大分生研) の招聘演者3名、および本COE拠点から井上大輔 (生体情報内科)、富田修平 (ゲノム研遺伝子実験施設) の2名の合計7名の演者により、何れも熱のこもった講演がなされた。また、悪条件の中ではあったものの約120名の参加者があり、各講演に対して活発な質疑応答が交わされ成功裏に終了した。

2. 平成16年度COE研究助成の交付

COE拠点事業の一層の推進をはかるべく今年も研

究助成の拠点内公募を行い、全拠点メンバーによる peer review に基づく評価で採択が決定された。出来るだけ広範囲の講座に助成金を配分するため、同一講座から2件採択の場合は2件を併せて100万円を支給することとし、合計10件に計700万円が支給された。

3. COE プロテオミクス解析室の完成

COE プロテオミクス解析室が完成し、超低温フリーザーとタンパク質検索同定システム、FT-MS の設置も全て終わった。プロテオミクス試料データ管理システムおよびそのサーバーも納入され、臨床インフォマティクスのシステム確立を目指した共同研究が進められている。松浦、芥川の両技術職員のスタッフも揃い、今後のプロテオミクス解析研究の推進に向けた体制が整えられた。

「ストレス制御をめざす栄養科学」を基盤とした若手研究者育成

拠点リーダー 臨床栄養学分野 武田英二

COEプログラムの大きな目的として人材の育成がある。栄養学COEでは、COE特任講師・研究員11名(うち2名は外国人)、RA15名(栄養学6名、医学5名、薬学4名)、TA2名(薬学2名)を採用して若手研究者の育成を行った。さらに、全ての大学院生を対象とした特別講義「こころの栄養学」を開講して、学内全体の人材育成に貢献した。

1) 大学院特別講義「こころの栄養学」の開講：栄養学、医学、薬学、歯学専攻の大学院生を対象として、平成16年10月より開講されている。

2) 若手研究者の研究内容と研究成果報告会(8月3日)：研究内容は次のとおりである。

病原細菌の感染時のストレス環境下における生体変化とそのメカニズム解析(中野政之)、水浸拘束ラットを用いた抗うつ効果のある食品の検索(石田香織)、酸化ストレス評価システムとしてのパーオキシリピドーム解析(河合慶親)、培養神経細胞におけるポリフェノール関連化合物の取り込みと抗ストレス作用(白井睦子)、培養細胞における抗ストレス作

用解析 - Chemoinformatics・QSAR - (木下崇司)、Isolating pharmacologically active compounds from plants by the use of virtual screening against multiple enzyme targets (Zsolt Lepp)、Lipophilicity determination by RP-HPLC: interpretation and application (Xiangli Liu)、断眠ストレス負荷時の生体反応に対する非環状テルペン化合物の効果(楠本健二)、活性酸素蛍光検出用試薬(APF)を用いたストレス惹起因子の検索(梨木邦剛)、ストレス制御をめざす栄養食品のナノデバイスによる探索(田淵眞理)、運動前野への反復経頭蓋磁気刺激による体性感覚誘発電位の変動(漆原良)、上肢ジストニア患者への前運動野に対する閾値下低頻度連続磁気刺激:運動野の興奮性変化(村瀬永子)、近赤外線スペクトロスコピーによる前頭葉機能測定の予備的検討(住谷さつき)。

いずれの研究も、DNAチップやナノテクノロジーを用いたストレス評価系の確立、培養細胞、動物およびヒトを用いた抗ストレス食品機能の評価をめざしており、飛躍的な成果が期待される。

就任のご挨拶

病態制御外科分野 教授 丹 黒 章



12月1日より山口大学消化器・腫瘍外科助教授から母校に帰ってまいりました。専門領域は食道外科、乳腺・甲状腺外科で、特に『悪性腫瘍に対する根治性を保った低侵襲手術の開発』を研究テーマに患者様個々の状態にあったオーダーメイド

治療を目指しています。食道癌に対する縦隔鏡下食道切除術や乳房温存手術における鏡視下腋窩郭清、MD-CTを用いたセンチネルリンパ節ナビゲーションなど国際的にもオリジナルな手技を開発してきました。臓器病態外科分野の島田教授と協力してひかり輝く外科医を育てたいと思っております。ご指導ご鞭撻の程よろしく願います。

教務委員会から

教務委員長 佐野 壽 昭



ここ数ヶ月の教務委員会の主なテーマは、全学共通教育履修の改訂に関する事項、各学科の学外実習経費の問題、中期計画・中期目標の中間評価報告書の作成、来年度以降の実践医学の見直し、全国共用試験（CBTとOSCE）の来年度本格導入に向けての準備、基礎系教育とチュートリアルのある方、栄養学科の教員資格のためのカリキュラム改訂な

どであった。とりわけ、医学科6年次の実践医学での学外実習は、医学部および病院全体の将来の人材確保にも影響をあたえるとの認識から、教務委員会と平行して教授会議、病院運営会議等でも議論されており、次年度からはこれまでとは若干異なる形で行われるようになる。また、中期計画・中期目標に取り上げられているe-learningに関して、医学英語自己学習プログラムが間もなく稼働し、カリキュラム全般への導入についてはその体制作りの段階に入った。

学生委員会から

学生委員長 石 村 和 敬



学生委員会の仕事はどれも重要なことばかりですが、なかでも重要なのが修学指導です。医学部の現時点での在学学生は医学科577名、栄養学科209名、保健学科386名（3年生まで）で、これらのうち、医学科53名、栄養学科7名、保健学科7名は留年経験者です。留年の理由はさまざま、進路を変更するために休学している場合やクラブ活動に熱中しすぎたような場合はあまり問題ありません。気掛りな

のは成績不振によるもので、さらに探ってみると深刻な理由が潜んでいる場合があります。勉強に集中できない、自分でもその理由がわからない、というような時には学生委員も含めて先生に相談してみてください。一方、先生方は必ず講義の出席をとっていただき、欠席の多い学生がいたら注意してみてください。成績不振に陥る学生は大抵欠席がちになるからです。留年は少数の例外を除いて時間の無駄です。早い適切な対応が求められる所以です。

栄養生命科学教育部から

教育・研究委員長 寺 尾 純 二



今年4月から発足した栄養生命科学教育部は暫く栄養学研究科と重なりますが、博士前期課程および後期課程1年次の学生を迎え、医科学、口腔科学、薬科学の3教育部との共通講義もはじまり、大いに活気づいてきました。本教育部の運営につい

ては課題もありますが、他教育部と連携しながら「栄養生命科学」という斬新な学問領域を担う研究者や専門職業人を養成するべく早急に整備しています。栄養に関わる研究に関心をもつ学生諸君の参加を大歓迎します。

蔵本祭

医学部広報委員

医：足立昭夫、栄：太田房雄、保：吉永哲哉

The University of Tokushima School Festival in Kuramoto

医学科の催し

10月29日から11月2日にかけて開かれた蔵本祭において、医学科の学生諸君は「青藍会・医学科講演会」を主催し、さらに、医・歯・薬学部合同企画の医療展の中で「解剖病理展」および「鍼灸展」を企画・主催しました。講演会に約200名、解剖展に約500名、鍼灸展に約100名の参加者があり、いずれも非常に盛会で大変好評でした。

29日の青藍会・医学科講演会では、東北大学名誉教授の岡本宏先生が「細胞の死と再生：糖尿病研究からの新しい生命観」というタイトルでお話くださいました。30、31日の解剖病理展では、人体の臓器の働きから生活習慣病、癌、感染症、アレルギー性疾患等につきその原因、治療、予防法まで、医学科生がパネルを使いわかりやすく解説しました。31日の鍼灸展では、鍼灸師の先生によるはり治療やお灸が実際に体験できました。このように、どの企画も学生諸君の日頃の勉学の成果に基づいた極めて意欲的なもので、多数の参加者があったのも当然であろうと思います。特に、解剖病理展は医学科の学生らしい企画で、内容は「医歯薬

企画医療展」というパンフレットにまとめられており、参加した学生諸君の心意気を感じます。大学祭がややもすれば単なる遊興に堕している現在、この気持ちを忘れず医学生として真面目に勉学にも取り組んでほしいと思います。

(文責：足立昭夫 協力：荻野広和)



栄養学科の催し



今年の栄養展のテーマは「沖縄食」で、沖縄が今まで長寿地域として知られたわけを沖縄の伝統食に注目し調べました。僕たちはこの栄養展に来てもらい、沖縄の長寿と食のつながりを知っていただくことによって、現在飽食と呼ばれるこの時代にもう一度自分たちの食生活を見直すきっかけになればという思いで始めました。

栄養展は大きく分けると、パネルの展示・冊子の配布・無料試食の提供というものを毎年やっています。冊子の作成は夏休み前から開始し、山本茂教授、石井先生、上江洲先生のお力添えもあって完成することができました。

無料試食のメニューは試食会などで検討を重ねた結果、マーミナーチャンプルー（もやしの炒め物）、豚の三枚肉と大根の煮物、ワカメ汁、そして沖縄県の特産品であるシークワサーの代替品として、徳島県の特産品のすだちを用いたゼリーを提供することとなりました。

当日は2日とも雨が降ってしまいましたが、そんな天気

にも関わらず10時の栄養展の開始より人が大勢つめかけ、150食用意していた無料試食のほうも午後2時ごろには無くなってしまおう程の盛況ぶりでした。アンケートにもおいしかったとの声が多く、大量調理というものが未経験だった私たちは予想以上の結果に大変驚きました。ただ、大量調理のために料理が冷めていたとの声がありました。この反省点を改善するべく、2日目は炒め物をなるべく作りおきをしないようにし、煮物は鍋を毛布でくるんで保温することにしました。その結果、冷めていたという意見はほとんどなくなり、その分おいしかったという意見が大変多くなりました。

また、パネルの展示のほうも大半の方が真剣に読まれていて、この栄養展のために蔵本祭に来られたという方もおられて、自分たちがやってきたことに興味をもっていただけたことを実感でき、大変嬉しかったです。



今回栄養展の委員長を務めたことで、大変多くの人と出会い、話をすることができました。蔵本祭実行委員の方々や、冊子を作るにあたって話をうかがいにいった四国大学沖縄県人会のみなさん、そして栄養展に来てくださった人達。どの方とも、もし委員長をやっていなければ話しをする機会などはなかったと思います。そして、ご協力してい

ただいた先生方、栄養展のメンバー、なによりご来店いただいた方々、本当にありがとうございました。色々と忙しくてつらい時期もありましたが、今では本当にやってよかったと思えた栄養展となりました。

(コーディネート：太田房雄 文責：河嶋伸久)

保健学科の催し

保健学科では、健康診断を模擬した内容による「模擬病院」の名称の企画展を学生主導で実施しています。具体的には、来訪者の身長、体重、視力、血圧、動脈血酸素飽和度の各測定やアルコールパッチテスト、尿検査（糖・蛋白）を希望に応じて行っており、今年は2日間で130名の多数の来訪者がありました。

模擬病院展の学生代表である検査技術科学専攻2年生の佐藤美咲さんに以下の体験メモを書いてもらいましたので紹介しておきます。運営に参加した学生にとって貴重な経験となっていることがおわかりいただけると思います：

「アルコールパッチテストの時にはお酒と肝臓の話を、酸素飽和度測定の際にはタバコの煙に含まれる一酸化炭素とヘモグロビンの話をさせていただいた。よくお酒を飲まれる方や、自身でヘビースモーカーとおっしゃられる方の中には『もっと身体のことを考えて減らさなければいけない』と話されるなど、多少なりとも、タバコやお酒について考え直してもらいきっかけになったのではないかと思います。私達の説明を熱心に聞いてくださったり、『普段なかなかやる機会がないからうれしい』と言ってもらえたこと、

さらに、帰り際に『ありがとう』の言葉をかけていただいたことは何よりもうれしかった。これから専門知識を身に付けることはもちろん必要だけれども、それだけではなく、情報をいかにわかりやすく患者さんに伝え、理解してもらうかと云うコミュニケーション能力の重要性を痛感した。今後勉強していく上で、とても良い経験になったと思う」

(文責：吉永哲哉 協力：佐藤美咲)



第21回 青藍会・医学科学術講演会

実行委員長 佐野 壽 昭

今年第22回を迎えた青藍会・医学科学術講演会は、東北大学名誉教授で学士院会員の岡本宏先生に「細胞の死と再生：糖尿病研究からの新しい生命観」というタイトルのご講演をお願いしました。岡本先生は、インスリン細胞の破壊機序を説明した「岡本モデル」と、同じくインスリン細胞の再生に関与するreg遺伝子の発見を含めて、糖尿病の研究に多大の功績を残されておられ、これまでに武田医学賞、ベルツ賞、紫綬褒章、日本学士院賞等を受賞されています。

10月29日医学部臨床第2講堂に教職員、学生、県内医師会会員等約120人が集まる中、開始された約1時間の講演では、ご自分の研究成果の一端を、細胞の死と再生という視点から分かりやすく説明されるとともに、細胞が死か、がん化か、再生かの分岐点ないし接点をなす物質（2面性をもつポリADPリボース合成酵素等）についての考察をされました。また、reg遺伝子の糖尿病治療応用への期待やreg遺伝子と癌との関連にも言及され、講演後の質疑応答も非常に活発で、参加者の多くは深い感銘を受けました。講演後の懇親会で岡本先生は、青野学長と学部学生が最後まで参加するこの講演会に大変心を動かされたと言われ、

学生にも親しく話しかけるお人柄が印象的でした。実行委員の関係者並びに学会当日ご協力頂いた医学科教職員、学生諸君に心から御礼を申し上げます。



クイーンズランド大学での臨床解剖実習の体験（実践医学実習）

医学科6年 桑村紀子



2ヶ月間の実践医学実習。機能解剖学分野の福井義浩教授がオーストラリアにあるクイーンズランド大学を紹介してくださり、私は、Dr.Bedi、Dr.Kippersという2人のドクターのもと、解剖実習をする機会を頂いた。今回は、現地で見てきた解剖学教育の様子を紹介する。

まず、日本との大きな違いは、医学生自らが解剖をすることはないということだ。彼らは既に剖出された解剖体を見て触って勉強する。やはり自分で解剖したいという医学生もおり、また医学生に解剖をさせたほうがよいという意見の先生方もいたが、解剖行為に費やされる膨大な時間を考えると剖出された解剖体を観察の方が効率的だ、との考え方が主流であった。

解剖学教室は医学生の実習のために、予め解剖したご遺体を準備しておかねばならないわけだが、それを自然科学専攻の学生がアルバイトでやっている。彼らは解剖学を履修し終えて成績が特に優秀だった学生たちで、チューターとして解剖実習する下級生たちを指導したりもする。彼らの立場は学部内で明確に位置付けられており、“解剖実習のちょっとしたお手伝いをする上級生”では決してない。学生でありながら、れっきとした解剖学教室のスタッフの一員とみなされている。

チューターと実習生、学生という立場が共通する彼らの中には親近感が感じられ、これが両者とも自然に緊張感と意欲を持って実習に取り組めるきっかけにもなっているようだ。解剖学教育の中で、上級生が下級生を指導する体制がカリキュラムに根をおろし、しっかりとその役割を果

たしている。いいシステムだと思った。ちなみに彼らには大学から1時間あたりAU\$22 (AU\$1 ≒ 80円) が支給される。

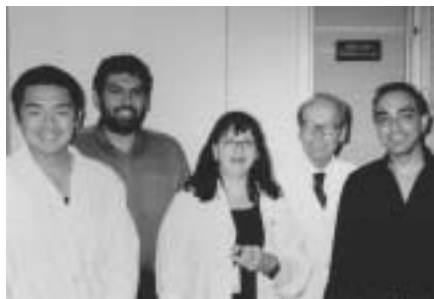
解剖が終わると、剖出が優れたものは plastination という方法で保存される。“組織中の水と脂肪をシリコンで置換する”という処理だ。処理された解剖体や各臓器は腐蝕したり変形したりすることなく、そのままの状態で半永久的な保存が可能になる。このような標本が豊富にずらりと並べられた広い標本室があり、いつでも自由に入り標本を手にとって観察できる。“解剖学教室”として理想的な場所だった。目で理解することは欠かせない解剖学の勉強において、手にとって観察できる実物は、どんなすばらしいアトラスや精巧に作られた模型にも勝ると思う。

現地の解剖学部に実際に身を置き、見てきた日本のシステムとの様々な違い。今回紹介した内容の中で少しでも徳島大学にフィードバックされて何らかの貢献ができれば幸いだ。



トロント大学付属セント・マイケルズ病院で実習（研究室配属）

医学科4年 大宮謙一



人体病理学分野佐野壽昭教授のご紹介で、6月から7月の約1ヶ月間、トロント大学付属セント・マイケルズ病院で実習をさせて頂きました。

病院の朝は早く、午前8時から外科切除標本についての gross conference が行われます。子宮筋腫・胆石と、比較的多く見られるものをはじめ、クローン病・移植拒絶腎などの稀な病変も見ることができました。病理部に勤務する10人の病理医はカナダのほか、インド・イタリア・フランス・スロバキアなど様々な地域から集まっており、「人種のるつぼ」という表現そのものでした。

実習は主に内分泌病理学の権威、コバックス教授に担当して頂きました。序盤は下垂体線種・褐色細胞腫・インスリノーマなど内分泌疾患の病理像の検討を行い、病理組織

の光顕及び電顕像の特徴について勉強しました。続いてコバックス教授が専門の下垂体線種についての MAP-2 project の研究を行いました。病理標本における MAP-2 の intensity と extent を MIB-1 陽性細胞数、及び有糸分裂像数と比較し、線種の種類や悪性度との関連を調べることを目的とするものでした。MAP-2 (microtubule associated protein 2) は neuronal marker で、一方 MIB-1 は細胞周期 G1、S、G2、M 期にある細胞に存在する Ki-67 タンパクに対する抗体です。双方とも線種の活動性を検出するのに役立つと考えられています。この比較を組織別に、ホルモン産生腫瘍、転移ガン、非腫瘍の症例で行いました。この実験には多くの症例が必要であり、このような機会を提供して下さったコバックス教授に感謝致します。

宿舎はトロント大学の寮で、帰宅するのは午後5時頃でしたが、緯度が高いため夏は夜10時くらいまで暗くなりません。僕はラグビー部に入っているのですが、現地のラグビーチーム、トロント・ドラゴンズの練習にも参加しました。カナダ人は概して体が大きくスキルも高いためハードな練習でしたが、とても良い経験になりました。

教育支援センターから

教育支援センター長 佐野 壽 昭

金曜日朝8時からの教育支援センター会議は、秋は学会シーズンで参加者数の変動が多いが、寺嶋先生、西角先生、佐野センター長に加えて、玉置先生、森口先生、有澤先生、谷先生がほとんど毎回参加して、教育プログラムの具体的実施事項に関して活発な議論を行っている。最近、e-learningの導入、学外臨床実習の今後のあり方について頻回に討議されている。また、支援センターとして、チューターFDの実施、医学教育ワークショップの実施（「いかに系統的全身診察を教えるか」）をテーマに東京大学医学教育国際協力研究センター大滝純司助教授を講師に迎え、8月28日

に実施)、チュートリアルポートフォリオ導入、3、4年生対象のチュートリアルアンケートの実施、全国共用試験(CBTとOSCE)の来年度本格導入に向けての準備作業、中期計画・中期目標の中間評価報告書作成などを進めてきた。なお、支援センター会議の位置づけが不明確であったので、教育支援センター規則を改訂してこれを明示している。寺嶋先生が12月からしばらく米国留学の予定である。西角副センター長らとともに寺嶋先生の抜けた大きな穴を埋めることになる。

生命科学のコアジャーナルについて

附属図書館蔵本分館長 泉 啓 介

外国雑誌を安く購入できていた時代は附属図書館にも各講座の書架にも多くの外国雑誌が並んでいたのですが、次第に印刷した雑誌が消えつつあります。言うまでもなく学術雑誌購読が印刷体から電子ジャーナル付の印刷体、そして電子ジャーナルのみの購読に転換しつつあるための現象ですが、1) 商業主義に伴う学術情報の急騰、2) 各分野への配分校費の減少がそれに拍車をかけています。

蔵本分館では生命科学に関する研究をメインテーマとする蔵本キャンパスの研究者が学術情報(学術雑誌)を安く効率的に共有できるように、1) コアジャーナル(中核雑誌)を定め、2) Elsevier Science社、Wiley社等については国立大学図書館協議会電子ジャーナルコンソーシアムに参加し、印刷体購入誌以外の雑誌もある程度オンラインで閲覧・ダウンロードできるようにしてきたわけです。平成15年度購入の蔵本地区のコアジャーナル経費は約7,600万円であり(平成15年度の各部局の配分校費の6.9%)、医学

部の負担額は3,200万円です(附属病院は別)。平成17年度からはこの額を上限とし、経費を共通経費化し(ただし、各部局間の負担率は固定)、逐年1%削減することになります。平成18年度から可能な限りコアジャーナルを電子ジャーナル化する方針ですが、それでもコンソーシアム参加が難しくなり、今までのようにはフルテキストのダウンロードができなくなります(大学間格差の拡大が危惧される)。各分野で購入している雑誌タイトル数の減少がこれに拍車をかけることになります。

今後は研究基盤としての学術雑誌を徳島大学自体がどう考えて対処してゆくかが問われますし、限られた予算で最大限の学術情報を得るためには、今でも十分に情報を収集し知恵を絞ってもらっているのですが、さらに図書館員の役割が大きくなります。また、学術雑誌の維持のためには大学間の連携、図書館の開放を進め、いかに外部資金を導入できるかを考える必要があるかもしれません。

科学研究費獲得のための講演会

学部長補佐(教育・研究担当) 玉置 俊 晃



国立大学法人に組織が変わり、研究のための外部資金導入がこれまで以上に教員に求められている現状を踏まえて、10月5日に科学研究費獲得のための講演会を臨床第2講堂で開催した。講師は、安

友康二教授、安井夏生教授、木戸博教授、板倉光夫教授にお願いした。多くの教員が参加して熱心に質疑応答が行わ

れた。4名の先生方は、これまでの科学研究費や他の大型研究予算獲得の経験から、申請書類作成に関して参考となる多くの点を指摘された。これまでに科学研究費がなかなか獲得できなかった教員や若い教員には大いに参考になったと思う。しかしながら、最も重要なことは申請書類作成テクニックではなく、一年間を通じて研究活動を活発に行い研究成果を発信し続けることと研究のアイデアを蓄積していくことである、との指摘があった。研究者仲間に認知されてこそ、科学研究費の獲得の確率が増加することを再認識させられた講演会であった。

■ 医 学 科

今年のオープンキャンパス（高校生への学部説明会）は、医学科は平成16年8月6日の午前中に医学部臨床第2講堂において行われた。高校生212名（県内165名、県外47名）と保護者22名の計234名が集まった。参加者が例年増加し、教室は参加者でいっぱいとなり暑さと熱気でむんむんという状態であった。まず医学科長の福井義浩教授が挨拶され、ミニ講義として基礎は佐野壽昭教授、臨床は脳神経外科の私が行った。質疑応答後に学内施設見学を3班に別れて行い、チュートリアル教育見学、中央診療棟（スキルラボやパソコン）見学、献体・解剖実習などを行った。特に大きな問題もなく終了したが、今後さらに参加者が増加したときのことも考え、説明場所や見学施設の再検討も必要になると思われる。



（永廣 信治）

■ 栄 養 学 科

8月5日9時30分から開始された栄養学科オープン

キャンパスは中屋学科長の挨拶および宮本教授の模擬講義に続き、COEプロジェクト、NST（栄養サポートチーム）の説明、栄養学科棟の見学など盛りだくさんの内容であり、熱心な参加者たちで賑わった。

（寺尾 純二）



■ 保 健 学 科

平成16年度保健学科オープンキャンパスは8月5日13:30より保護者・教員を含め185名の参加者を迎え、前澤学科長と各専攻主任による学科および専攻の概要説明後、保健学科棟の施設見学と各専攻の相談会を実施した。看護学専攻では同日午前より体験入学を実施し、午後から40名の参加者全員オープンキャンパスに合流する形で行われた。終了後のアンケート結果から、3専攻ともに概ね好評であり、75%以上がぜひまたはできれば受験したいとの回答であった。説明会の内容、時間等適切と思われるが、看護学および検査学専攻受講者の5割以上が他専攻の説明会にも参加を希望しており、コ・メディカルに対する予備知識の少ない学生に対して、複数の専攻の説明会に参加できるような計画が次年度以降の検討課題であると思われる。

（小野 恒子）

城東高校生の授業体験



後期木曜日I講次に行っている医学科1年「人体解剖学入門」（約95名）と薬学部1年「解剖生理学」（80名）の合同講義に城東高校2年生が参加し授業体験を行った。10月21日は循環器（心臓、血

管、血液）の講義であったが、約10名の高校生は熱心に講義に耳を傾けてノートを取っていた。生徒の感想文からは各自が講義内容全般に渡って新鮮な興味を持ってくれたことがよく伝わってきた。また、別のグループは栄養学科の授業体験を行った。この試みは城東高校からの依頼によるものであるが、大学の教育カリキュラムを理解して頂くためにも重要である。高校の進路指導担当の教員や学校長に開放しても良いのではと思われる。

（福井 義浩）

外国語研究会 (FLS) が BMC で準優勝

徳島大学蔵本外国語研究会 (FLS) は、8月に京都府立医科大学で開催された WJEMA SUMMER CONFERENCE において BMC (Basic Medical Conference) という競技に出場し、準優勝を果たすことができました。WJEMA とは西日本の医療系大学生間の親睦をはかりつつ、医学英語の奨励・発達及び日常会話力の向上を目的とする団体で、蔵本 FLS を含む 18 大学が加盟しています。夏の大会には数種の競技があり、BMC は基礎医学の分野からあるテーマを選び、すべて英語で 30 分間のプレゼンテーションを行い、質疑応答するもので、徳島大学チームは“Osteoporosis 骨粗鬆症”をテーマとしました。私達は WJEMA に近年再加盟を果たしたばかりであり、競技入賞は実に 23 年ぶりの出来事です。また今春には同様の大会を徳島大学 FLS で主催し、そこ



も大成功を収めることができました。今後も部活が一丸となり、国際化の進む医療に対応していけるよう、さらなる医学及び日常英語力の向上に励んでいきたいと考えております。

（榎野 亘）

2004 年 BMC 参加大学

京都府立医科大学（優勝）
徳島大学（準優勝）
京都大学（第3位）
熊本大学（第4位）
関西医科大学（第5位）
岡山大学（第6位）
大阪大学（第7位）
※神戸大学・高知大学・大阪医科大学は棄権

徳島大学チーム

小林 彩華（チーフ）
榎野 亘
柴田 貴世
中村 佳世
真鍋 泰明
上畑 陽子
砂川 暁

WJEMA ホームページ <http://www.ssdk.net/~wjema/japanese/>

報告

第 56 回西日本医科学生総合体育大会

8月2日(月)～8月4日(水)

【団 体】

バドミントン（男子）優勝 弓 道（男子）優勝

【個人戦】

バドミントンダブルス部門（男子）	1位	笠井・大山組
水泳（男子）100m平泳ぎ	4位	鈴江 真史
400m個人メドレー	1位	鈴江 真史
	5位	邊見宗一郎
（女子）50m平泳ぎ	2位	三崎万里子
100m背泳ぎ	4位	三崎万里子

よく学び、よく遊べ、という少し気がひけるので、スポーツせよ、とした。医学部を選択した以上、この幅が広く奥も深い興味ある学問を一心に学ぶのは当然のことだが、曽根医学部長も前の号の巻頭言で述べておられるように、学生時代にスポーツなど他のことにも情熱を持ち、心身を鍛え高めることもまた重要である。

私は学生時代、まさによく遊び、スポーツをした(もちろん学びもした)。私は小さい頃、体も気も弱い本当に弱虫だったこともあり、警察官だった父が小学生の私に柔道を習わせた。運動神経だけが取柄だったからか腕を上げ、当時柔道で無敗のチームとして全国に名を知られた熊本の藤園(とうえん) 中学の主将を務めた。オリンピック金メダリストの山下泰裕氏も後輩である。練習は日曜日でも祭日も試験前もあり、休みは正月の2日間しかなく本当につらかったが、これくらい練習すれば強くなるということを知った。地元の進学高校と熊本大学に進んでからはむしろ伸び伸びと柔道をやることができた。高校—大学にかけて軽量級個人で九州大会を3連覇しモントリオールオリンピック銀メダリストを決勝で破ったこともあるが、肩を痛め習慣性脱臼となり、とうとう全日本学生を制覇できなかったのは少々悔いが残る。

医学部5年生になり全学の試合にも出場できなくなったのを機会に遊び呆けていたが、医学部の部員が5—6名いたので、よし西日本医科学学生大会(団体は5人制)の優勝でも狙うか、とまた奮起し強化練習、合宿と後輩を苛め抜いた。当時苛め抜かれた後輩たちとは今でも仲良くつきあっている。その効果あり5年生、6年生の時に西医体で団体優勝したが、決勝の相手が2年間ともなんと徳島大学であったのは、今となってはまさに奇

遇である。5年生の時の決勝戦では、徳島大学医学部には西本という大柄の強い男(現在、横浜で外科を開業)がおり、私が先鋒で1勝、彼が大將で1勝の引き分けとなり、彼と代表戦で戦った。彼の体重は120kgほど、私は70kgで、まるで大人と子供の試合のようであったが、延長戦までも



得意の背負い投げで決める瞬間。学生時代の写真

つれた後、運良く小内刈りで技ありを取り勝ったことが、学生時代のいい思い出になっている。6年生のときは徳島の地で徳島大学を破り連覇した。優勝祝いと称して鷹匠町あたりを飲み歩いたのは楽しかった。度が過ぎて意識を失い、翌日の個人戦は二日酔い状態でふらふらだった。前夜に意気投合した鷹匠町のお姐さんたちに応援してもらい奮起はしたが、準決勝で和歌山医大の男に投げられたのも、苦いながらもいい思い出となっている。

学生時代で思い出すのは、楽しきにつけ苦しきにつけ柔道のことが多いが、いずれも自分の人生の大きな宝物になっている。また柔道を通して得た友や先輩、後輩、ライバルとは今も親しい仲間である。医療や医学に一生たずさわることになる学生諸君には、この学生時代を楽しく有意義に生きて欲しいし、学問以外にも情熱を注ぐものを見つけ幅広くまた大きく伸びていって欲しいと願っている。

徳島新聞医学研究助成金受賞者決定

「徳島新聞医学研究助成金」(徳島新聞社会文化事業団主管)の第三回贈呈式が六日、徳島新聞社であり、それぞれ助成金50万円が贈られた。分子制御内科学の谷憲治助教授と生体防御医学の前川洋一助手。

谷さんは「放射線肺臓炎の線維化病態に基づく新規分子標的治療法の開発」をテーマに、放射線照射による肺がん治療が招く正常な肺組織の損傷に対する治療薬開発を目指している。



前川さんは「Notch(ノッチ)分子による免疫系制御機構の解明」をテーマに、細胞の系譜決定に重要な働きを担うNotch分子の機能を医療に生かす研究に取り組んでいる。

坂田雄幸理事長から助成金を受け取る(左から)谷助教授、前川助手

平成16年12月7日
徳島新聞朝刊より抜粋

若手研究者 共同研究奨励賞

学科や講座の枠を超えた共同研究により新しい領域を開拓しようとする若手研究者を奨励するために発足した医学部若手研究者共同研究推進助成金(研究奨励賞)は今年で2回目を迎えた。10月25日に開催された審査委員会において17件の応募から事前審査で選ばれた5件について各研究代表者による発表と質疑応答を行った結果、機能解剖学分野・澤田和彦助教授と運動機能外科学分野・松井和人助手のプロジェクトが採択された。採択の如何に関わらず今回応募された研究の内容はいずれも質が高く、研究の展開が大いに期待されるものであった。(寺尾 純二)

「青藍講堂」の誕生!

昨年度、故青藍会員のご遺族より「医学部のために役立てて欲しい」との願いを込めてご寄付(1,000万円)を頂いたのを機会に、医学部教育研究振興基金を設けて検討を行ってきました。

医学部第一臨床講堂は約40年の歴史を刻み、数多くの医学生が臨床教育を受け、思い出深い階段教室として存在して来ましたが、老朽化がひどいために最近では取り壊しの計画に入っていました。そこで、青野学長に再生のための全面改装の承諾を得て、ご寄付を原資にして9月より2ヶ月間をかけ、藍色を基調とした快適性と落ち着いた雰囲気の確保を目標に再生のための改装工事を行い10月28日に完工しました。青藍会からは講堂の設備充実を図るために賛助金のご配慮を頂きました。徳島大学医学部卒業生並び

に在学生にとって誇りに思える格調高い講堂として大きく衣替えを果たしたといえます。医学部として、故青藍会員並びに青藍会からの心温まるご支援並びにご援助に応え、

その趣意に報いるために、「第一臨床講堂」の名称を平成17年1月より「青藍講堂」と変更し、蔵本地区における指導的な医療人育成のための教育拠点として位置付け役立てる予定です。また、高度先端医学、医療の発信の場としても多目的に利用されることを期待しております。

(曾根 三郎)



プレハブ講義棟の完成

栄養学科研究棟が昨年改装され、それ以後、独自の講義室を有していなかった。学生には迷惑をかけたが、やっと、この度医学部の臨床講義室の横に共通講義室が完成した。プレハブではあるが耐震構造になっており、50人の講義室が2つと、100人の講義室(写真)が1つある。やや天井が低くスライドを映すのに少し不便であるが、今までジプシーみたいにあっちこちと借りに行っていたのよりはだいぶ改善された。各学年も独自の教室が持てることになった。

講義室建設にお世話になりました関係諸氏に紙面を借りてお礼を申し上げます。

(中屋 豊)



第51回徳島大学解剖体慰霊祭・平成16年度白菊会会員と学生との懇談会



今年度は台風23号の影響で延期開催となり、平成16年11月17日(水)白菊会会員と学生との懇談会が午後1時30分より医学部第二学生実習室で行われた。約100名の会員の方々が集まり、医・歯学部学生60名と各テーブル別に分かれて懇談を行い、さらに解剖実習についての感想を6名の学生が発表した。午後3時からは、第51回徳島大学解剖体慰霊祭が大塚講堂において執り行われた。御遺族、医・歯学部の教職員、学生等が参列し、献体者の霊に黙祷を捧げた後、医学部長・歯学部長をはじめとする関係者が追悼のことばを述べた。その後参列者全員が祭壇に献花し、亡き御霊のご冥福をお祈りした。

(一柳 愛)

編集後記



今月号は特集として、「3部局長対談」と「蔵本祭」「学生の国際交流」を取り上げてみました。FLSが準優勝等、学生の活発な活動状況も伝わってきます。教員の外部資金獲得額も着実に増加しています。しかし、青藍講堂の誕生、プレハブ講義棟の完成等により施設整備は少しずつ進展していますが、降雨時の浸水やトイレ、水まわりの老朽化等、教育研究環境はまだまだです。次は、教育・研究棟の改修計画が進展することを願っています。

(福井 義浩)

発行者 医学部長 曾根三郎

編集委員長 広報委員長 福井義浩

編集委員 広報委員 足立昭夫、武田憲昭、大下修造、太田房雄、吉永哲哉、森口博基、井上展啓

医学部だよりへのご意見・ご要望は、木村浩子(第1総務係) hkimura@jim.tokushima-u.ac.jp までお願いします。

Tel:088-633-9118 Fax:088-633-9431

URL <http://www.hosp.med.tokushima-u.ac.jp/university/servlet/index>